

都小 研 会 報

・発行所
・東京都小学校社会科研究会
・東京都新宿区四谷2-6
・発行人 石井正広
・編集人 西谷秀幸

群馬大会の成果を生かす

東京都小学校社会科研究会会長
新宿区立四谷小学校校長 石井正広



令和七年十一月十三日(木)、十四日(金)に、第六十三回全国小学校社会科研究協議会・群馬大会が開催されました。

大会主題「よりよい社会を創造する児童を育てる社会科学習」思考力、判断力、表現力等を高め、社会参画意識を育てる学習の充実」を掲げ、第一日の全体会での基調提案及び第二日の会場校での研究発表と授業公開・学年別授業研究会を通して、群馬県から、その研究成果を力強く発表していただきました。

第一日目の全体会は、群馬会館で行われました。群馬会館は、昭和五年に天皇即位の大典を記念して建設された群馬県初の公会堂建築で、国登録有形文化財

となっている歴史的建造物です。全国小学校社会科研究協議会研究発表会に相応しい、歴史を感じてきました。

全体会の基調提案では、研究内容である

①教材開発の工夫

「学校や地域の特色を生かした教材」「生活体験を生かした教材」「社会の今日的な課題に対応した教材」の三つの観点から開発した教材を組み合わせた単元構成が紹介されました。

②学習過程の構想

自分と社会をつなげる指導を取り入れた学習過程やつかむ段階から持ち続けた見通しを基にした「選択判断」や「意思決定」の構想が紹介されました。

③評価の在り方と指導の工夫

よりよい社会を形成していくこととする思いや考えを見とるための振り返りの例として、一枚ポートフォリオによる振り返りが紹介されました。

三つの研究の視点から実践的な研究実践の報告や公開授業に

よる提案がすすめられました。基調提案に対する指導・講評では、文部科学省教科調査官

小倉勝登先生から、「学習指導要領実施状況調査」や中教審の審議のまとめなどに基づいて、学習指導要領改訂後の社会の実践課題や改訂の方向性について紹介いただき、群馬県の実践成果と関連付けて授業改善の取組を価値付けていただきました。

記念講演の講師として、群馬県出身の落語家・ぐんま特使である林家つる子様をお招きして、「挑戦する勇氣」背中を押してくれた大切な人の言葉」という演題で、ご自身が落語会に入るきっかけとなった人々の言葉をご紹介いただいたあとに、女性の視点からの落語を楽しく聞かせていただきました。

二日目の会場別研究会は
第一会場：前橋市立桃井小学校
第二会場：高崎市立塚沢小学校
それぞれの会場において、各学年の授業公開と学年別授業研究会が行われました。

また、学年別課題研究会が、二会場で合計して、群馬県八本の会場でも、熱心に協議が展開されました。

加えて、会場運営の都合から紙面発表となった実践十本も、研究紀要に掲載され、参加者と共有することができました。

今年度の研究大会は群馬大会の一回ですが、研究成果が各地区の小教科教育の発展に生かされることを大いに期待するとともに、研究の熱意が次年度の徳島大会、京都大会へとつながっていくことを願っています。

群馬大会報告

全国小学校社会科研究協議会事務局長
港区立立筈小学校校長 矢部洋一

第六十三回全小社研群馬大会は、十一月十三日(木)、十四日(金)に「よりよい社会を創造する児童を育てる社会科学習」思考力、判断力、表現力等を高め、社会参画意識を育てる学習の充実」を主題として前橋市と高崎市で開催されました。

第一日目の全体会は、前橋市群馬会館で、二日目の会場別研究会は、前橋市立桃井小学校、高崎市立塚沢小学校の二会場で行われました。

全体会では、大会主題について、「群馬教育ビジョン」を踏まえ考える社会科の実践を目指してきたこと、児童の社会参画意識を育てるために「価値判断」と「意思決定」を重視し、「教材開発の工夫」、「学習過程の構想」、「評価の在り方と指導の工夫」の三つの視点で研究を進めてきたことの説明がありました。

文部科学省教科調査官、小倉勝登先生からは、「令和四年度学習指導要領実施状況調査 教科等別分析と改善点」の児童質問紙調査で「社会科の学習が好きだ」等について肯定的な回答の割合が前回調査よりも高くなっていることは、各学校での取組の成果であるとお話がありました。

また、次期学習指導要領改訂の動きや「深い学びの実装」についての解説がありました。本大会については、「選択・判断」と「価値判断」と「意思決定」の関係性に注目されていました。記念講演では、落語家で、ぐんま特使の林家つる子氏から、「挑戦する勇氣」背中を押してくれた大切な人の言葉」と題し、幼い頃は消極的だった自分にこの道に進むことを勧め、支えてくれた家族や師匠とのエピソードをお話いただきました。

二日目の会場別研究会では、二会場で大会主題を受けた授業が展開され、多くの参加者がありました。各会場では、地域素材の活用や、外部講師を招いた授業、価値判断を求める場面設定などが提案され、子どもたちが意欲的に考え、発言していました。また、授業後の学年別授業研究会、学年別課題研究会においても貴重な実践提案と熱心な協議が行われました。

開催にあたり、群馬県、前橋市、高崎市各教育委員会、県内の先生方とOBの皆様には、授業研究はもとより、準備やきめ細かな対応に心より感謝申し上げます。

特集

全小社研・群馬大会に学ぶ

第一会場

前橋市立桃井小学校

一 はじめに

桃井小学校は、学制発布を受け、明治五年、群馬県下最初の学校「厩橋学校」として開校した。翌年、中心市街地に「桃井学校」が開校し、両校は明治二十三年に合併した。「厩橋」と「桃井」の冠を何度か交替しながら、明治二十六年以降「桃井小学校」が定着した。

昭和になると、児童数が急増し、昭和三十二年、桃井小学校から分かれた中央小学校が新設された。その後六十年が経過し、児童数が減少したことに伴い、平成二十八年に中央小学校と合併して現在に至っている。

二 公開授業

三年生から六年生まで、各学年一学級ずつ授業が公開された。三年「店ではたらく人」では、身近な地域における販売の仕事の様子を見学・調査するため、校区で店舗数が多く、家庭で利用することが多いドラッグストアを取り上げた。四年「高い土

三 全体会

(一) 基調提案

児童が三つのポイントを身に付けることを重視した。

(ア) 社会的事象を「自分事」として捉えること

(イ) 問題解決の過程において

「自分なりの考え」をもつこと

(ウ) 「価値判断」「意思決定」をすること

さらに、県小社研の研究の視点に沿って、これらの三つのポイントを具体化した。

①教材開発の工夫

社会的事象を自分事として捉える(ポイント(ア)と関連)

・生活経験や地域との関わり

・今日的な社会の課題

②学習過程の構想

自分なりの考えをもち、価値

判断・意思決定をする(ポイント(イ)(ウ)と関連)

・つかむ過程の工夫

・まとめる・生かす過程の工夫

③評価の在り方と指導の工夫

社会的事象を自分事とし、主体的に関わる姿を育てる(ポイント(ア)(イ)(ウ)と関連)

(三) 指導講話

群馬大学の宮崎沙織准教授より、「未来志向の協働的な社会科授業づくりに向けて―校内研

修で進めた社会科授業研究を通して―」という内容で、授業研究を通して考察したい三つについて指導講話をいただいた。

①社会科の問題解決的な学習の充実に向けて

修で進めた社会科授業研究を通して―」という内容で、授業研究を通して考察したい三つについて指導講話をいただいた。

三年生は問いを可視化させる

ところから始め、徐々に子供自

らの問いへの移行を目指した。

六年生では、単元のゴールイ

メージから学習問題をつかむ時

間を構想できるようにした。子

供たちが自分たちで学習を進め、

みんなで授業をつくることができ

るようにした。また、追究し

続ける子供を支える振り返りと

教師のフィードバックとして、

達成度ではなく一人一人の活動

の質に着目した「肯定的フィー

ドバック」を行った。

②社会課題と向き合うために

問題の原因追究「なぜおきて

いるか」(問題思考)だけでなく、

持続可能な未来社会像をイメー

ジした上で「どうしたらよいか」

(解決思考)考えさせた。

例えば、四年「天狗岩用水」の

課題は、原因が分かってもすぐ

に解決策を考えられないため、

解決策ではなく、解決に向かう

ための人の働きや社会の仕組み

へのアプローチとして、課題に

向き合う専門家の理解を参考に

して、解決員さんと一緒に考えた。五年生は、社会課題の解決志向的な学習として、ステップ

1で日本の運輸や貿易の現状と

課題を理解し、ステップ2で日

本の貿易策をめぐる多様な意見

を議論し、意思決定を行った。

③校内研修としての授業研究のあり方

一年半の歩みで、スクラム的

な授業開発が可能になった。協

働的でスクラム的な取組を行う

ことで、学校全体で問題解決的

な社会科授業を広げてほしい。

四 おわりに

第一会場の桃井小学校は、と

ても綺麗なオープンスペースの

学校である。その施設環境はも

ちろんのことだが、目を輝かせ

て主体的に学習している子供の

姿やそのような姿に子供たちを

導いている先生たちの姿から、

改めて全国各地から視察に来る

人が多い理由を実感することが

できた。また、学年別授業研究

会や課題研究会で、群馬県や全

国各地の先生方と議論を重ねる

ことができ、充実した学びの多

い時間を過ごすことができた。

(板橋区立板橋第五小学校

校長 西谷 秀幸)

第二会場

高崎市立塚沢小学校

【研究の概要】

塚沢小学校は歴史が古く、その始まりは明治7年(1874)まで遡る。150年以上に渡る歴史を刻んできた背景があり、地域に深く根差した学校である。

研究主題を「よりよい社会を創造する児童を育てる社会科学習」、副主題を「思考力・判断力・表現力等を高め、社会参画意識を育てる学習の充実」として研究を推進した。授業づくり

では、全学年「地域の特色を生かし、社会をより身近に感じられる教材の工夫」「思考力・判断力・表現力を育てる学習過程の工夫」「児童の学びを確かにする評価の工夫」の3点を意識して、児童が「社会とのつながり」を考えることのできる学びの実現」を目指した研究である。

【全体を通して】

全体会の体育館内の壁には、低学年から高学年までの実践が模造紙に掲示してあり、「考える・表す・くり返す」を合言葉に、これからの時代に求められる資質・能力を意識した授業改善を紙面発表で、紹介している。公開の全学年の実践に共通することは、「個別」に考える場面が設定されており「対話」がある。

そして「地域」と「学び」を結び付ける「人」が見える教材の工夫がある。さらに、地域を身近に感じさせるゲストティーチャー(GT)との直接交流がある。加えて、地域を見る視野を広げる二段階の問いの追究がある。こうした重層的な工夫により、児童に社会とのつながりを考えさせている。それが「見えなかったものが見える」姿を引き出し、地域の深い学び(理解)、地域への新たな愛着につながる実践に昇華させている。

【第三学年】

「おかしをつくる工場」の実践では、だれもが見たことがあ

る有名なおかしの会社が地元高崎市にあり、その工場の方をGTに教室に招き、消費者の願いにこたえる生産者の工夫を調べた。そして本時では、「なぜた

【第四学年】

さんの工夫や努力をしているのだろう」という追究してきたこと

くから受け継がれてきた3事例を学習した後「高崎市にある古くから伝わるものを受け継ぐ上で大切にしていきたいことは何だろう」を新たな問いにして、二段の単元構成で追究し、古くから残る「上野三碑」がユネスコ「世界の記憶」に登録できたことを調べた。本時では、異なる立場から上野三碑を守り、その価値を現代に伝えていく三人のGTの思いに触れて、児童は自分も未来へつなぐ社会の一員であることと見え、地域への愛着を深めていた。

【第五学年】

「これからの工業生産とわたしたち」の実践では、最初に日本全体の工業生産を調べ、中小工場が優れた技術で日本の工業を支えていることを学ぶ。単元後半には、校区にあるものづくり企業2社を事例に取り上げ、

「これからの日本の工業が持続可能なものづくりをしていくためにどのようなことが大切なのだろうか」を追究し、本時では、「環境」と「消費者」を結び付けて、持続可能な社会に向けた工業生産の発展について思考し、発表した。地元企業GTの話から「高い技術」で日本の工業を支えている思いを知り、そのリアルが身近な地域にあることに、

児童は誇らしく感じている様子であった。

【第六学年】

「市民の願いを実現する政治」の実践では、政治の仕組みを学んだあと、単元後半には「これから高崎市を住みやすい町にするためにどのように政治を進めていくとよいのだろうか」を追究し、本時では、市議会議員役の複数の児童が政策を主張した。主張には「どの立場か」「その理由は」「考えられる効果とは」を明確にしてICTを活用しながらプレゼンテーションを行った。そして現役の市議会議員GTに感想をもらい、価値付けられていた。授業者は最後に「政治は自分たちの生活にとって遠いもの?」と問うと児童たちは、「学校生活や日々の暮らしにつながっている」と振り返り、自分事として政治を捉えていた。

【指導講評 大妻女子大学教授 澤井 陽介 先生】

塚沢小学校の研究に昨年度より指導助言を行っている。地域の特色を生かし、社会をより身近に感じられる教材の工夫から思考力、判断力、表現力を高め、社会参画を育てる授業の充実を図る。教材化の工夫にはそのバランスを考える。「具体的・実

感的側面」写真資料・見学や模擬体験など、「客観的側面」数値等のデータ、「共感的側面」取材内容の資料・GTの話など、社会科学の授業におけるGTとの交流の目的

- 1 実社会の課題と出会う
- 2 やり取りを通して本場の言葉を聞く
- 3 考えたことや提案を実社会とすり合わせる

【学年別授業研究会】

第六学年

「市民の願いを実現する政治」

授業者の経過説明のあと、参観者は成果と課題を付箋に書いて4人でグループ協議を行った。グループでは、政策は「防災対策」「魅力あるイベントの開催」「子育て支援政策」「高齢者への政策」の4点に絞られていた。どの政策にも共通するのは、「よりよい高崎市にするためには」ということであった。児童が、少子高齢化の進行により、人口が減っていく「現実を」とどう市政に反映させていくのかを共通理解していた。児童は様々な立場の人の願いを聞きながら限られた予算の中、優先順位を考えて政策を進めることが大切であると考えていた。これらを協議のまとめとした。

(府中市立南白糸台小学校

校長 横田 稔)

群馬大会・課題別提案

Ⅰ 研究主題とのかかわり

東京都の研究主題である「社会とつながり未来を創る子供の育成」を実現するために五年部会では、目指す子供像を「我が国の国土や産業の確かな理解を基に、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考え、我が国の国土や産業の未来を考えようとする子供」と設定した。これらを実現させるために、本実践では、大単元全体を通して、食料生産の発展を考えるようにした。

Ⅱ 研究の視点と実際

【研究内容】

「主体的に問いを追究する工夫」

食料生産の単元は、①食料生産の概要②農業③水産業④食料生産の発展の四つの小単元で構成されている。それら小単元を貫く大単元の学習問題を設定した。

小単元一では、食料生産の概要を学習し、農林水産省の方をゲストティーチャーとして、日本の第一次産業のよさや強みについて捉えた。一方で、第一次産業の就業者数が減少している

こと、高齢化が進んでいることや日本の将来推計人口が減少していくことから、農林水産省の方も本当に困っていることを知ること、問題意識をもち、学習問題を「日本の食料生産は、これから何を大切にしていけばよいのだろう。」と設定した。この問題意識を常にもち、学習問題を貫いて、農業や水産業、その他第一次産業の学習を進めていくことで、主体的に問いを追究する姿が見られた。

【研究内容二】

「社会的事象の見方・考え方を働かせる学習活動」

子供一人一人が食料生産の発展を考える際に同心円チャートを活用した。第一次産業の課題を中心とし、その外側に課題に対する取組、一番外側に取組に対する成果と課題を付箋で書き込んでいった。その際、課題や課題解決の取組や成果と課題を関連付けたり、総合したりしながら、整理できるようにした。これらを通して、食料生産の未来を見える化することで、食料生産全体の発展を考える際の一助となった。

本小単元で扱う、野菜や果物、畜産農家を農業や水産業で培っ

た見方・考え方を働かせて調べられるように教材化を図った。また、いくつかの資料から子供が選択・判断して学習を進め、協働的な学習を促すジグソー学習を取り入れた。これらを通して、第一次産業の生産者や消費者、環境面や外国との関わりなど、様々な立場から多角的に日本の食料生産全体の発展に目を向けることができた。

【研究内容三】

「子供の学びを確かにする評価の工夫」

自己の学びが確かなものになっているのか形成的評価として毎時間、子供の振り返りに対して適宜コメントを入れたり、声をかけたりした。また、子供同士で相互評価をする時間を確保し、互いが協働的に学習問題を解決していこうという意欲を継続する姿が見られた。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

大単元を通して手だてを考え、取組や課題を比較したり、関連付けたりしながら主体的に学習することができた。また野菜や果物、畜産も扱い、ジグソー学習をすることで、児童の興味・

関心に合わせて学習を進めることができたことは成果と言える。一方で、同心円チャートに整理していくことを試みたが、いくつかの関連・総合が多く、スムーズに整理することが難しく

かった。また、食料生産の発展を考える際に、優先順位をもたせることができず、食料生産の発展について「議論する」ところまで至らなかった点が課題である。

そこで、本実践を追試し、同心円チャートの代わりに、四象限マトリクスを活用した。縦軸を効果の大小、横軸を時間軸として各立場と取組について整理した。そのことで、多角的に食料生産の発展について考える姿が見られた。

今後は、本実践のように大単元や産業学習、国土学習、第五学年の学習など、単元を構想する上で、あらゆる視点からの構想を考えて、単元をデザインしていく。また、見方・考え方を働かせる学習活動や「発展」「選択・判断」を考える際に議論することができると学習活動を吟味していく。

（文京区立昭和小学校
指導教諭 寺本 大二）

都小社研

今年度の研究授業及び
研究発表会について

東京都小学校社会科研究会
調査研究部長
八王子市立散田小学校校長 島田 学

研究主題「社会とつながり未来を創る子供の育成」に基づき、各学年部会が副主題を設定して授業研究会を実施し、研究発表会にて実践報告をいたします。また、都小社研研究員も実践的な研究を進め、成果報告会を開催いたします。

【三年部会の授業研究会】

①九月二十二日

「わたしたちのくらしと農家の仕事」

江戸川区立鹿骨東小学校

近藤 直大 主任教諭

②十二月二日

「火事から人々を守る」

八王子市立由木中央小学校

友田 詩子 主任教諭

【四年部会の授業研究会】

①六月二十三日

「ごみの処理と再利用」

八王子市立柏木小学校

小山 恭延 教諭

②十月三日

「受け継がれる文化財と
年中行事」

多摩市立貝取小学校

竹内麻菜美 主任教諭

○指導・講評

文部科学省初等中等教育局
教育課程課教科調査官

小倉 勝登 先生

【五年部会の授業研究会】

①十月九日

「水産業のさかんな地域」

江東区立豊洲北小学校

吉田 隆志 主任教諭

②十一月二十日

「自動車をつくる工業」

千代田区立お茶の水小学校

佐山 雄基 主任教諭

【六年部会の授業研究会】

①九月二十二日

「武士の政治が始まる」

世田谷区立砧小学校

小池 羽音 主任教諭

②十一月七日

「江戸幕府と政治の安定」

中野区立桃花小学校

久米 大輝 主任教諭

【令和七年度研究発表会】

○日時 二月二十日(金)

午後一時三十分より

○場所

新宿区立四谷小学校

(石井 正広 校長)

○内容

授業公開、研究発表・協議

○指導・講評

文部科学省初等中等教育局
教育課程課教科調査官

小倉 勝登 先生

【都小社研研究員成果報告会】

○日時 三月五日(木)

午後一時三十五分より

○場所

新宿区立四谷小学校

(石井 正広 校長)

○内容

授業公開、成果報告・協議

○指導・講評

明星大学教育学部特任教諭

相原 雄三 先生

都小社研

令和七年度 夏季研究会

東京都小学校社会科研究会
調査研究部長
八王子市立散田小学校校長 島田 学

八月二十二日(金)、新宿区立

四谷小学校を会場として、都小

社研夏季研究会を実施した。当

日は、総勢五百名以上の参加者

が集まり、社会科の学習指導の

充実に向けた熱意をこれまでで

上に感じる会となった。

【全体会】

「令和七年度の都小社研の
研究について」

【講演会】

テーマ

「社会科授業づくりの基本と
これからの可能性」

講師 大妻女子大学大学院

教授 澤井 陽介 先生

中教審教育課程企画特別部会

の議論などを踏まえ、これから

めざす授業づくりとして、①子

どもが選り調整しながら進める

授業、②みんなで「共有」して

考え話し合う授業、③「意味理

解」を促し、概念を活用する授

業、④「自分の学び」を見つめ

る目を育てる授業が必要である

ことをご指導いただいた。

【課題別ワークショップ】

①「学習問題と学習計画づくり」

講師 帝京平成大学

教授 古藤 玲子 先生

②「まとめと表現活動」

講師 青山学院大学

特任教諭 月岡 正明 先生

③「板書の仕方」

講師 前立正大学 教授

石橋 昌雄 先生

④「教科書の使い方」

講師 白梅学園大学

特任教諭 森 清隆 先生

【学年別ワークショップ】



○三年

「どんな『人物』とかわかる
の?」「もつとよいかかわりを
生み出そう」の二つのワーク
シヨップを実施し、社会科の授
業において「直接、人物とわか
わる」ことの重要性を確認した。

○四年

「先人の働き」の内容を例に、
「学習のデザイン」を考えるボ
イントを確認した他、グループ
で、同内容について、これまで
の実践事例や課題等を共有した。

○五年

「情報産業とわたしたちのく
らし」の実践のポイントについ
て提案し、同実践の成果や課題
についてワークシヨップ形式で
協議した。児童にとってテレビ
放送ではなく、SNS上の情報が最
も身近な存在になりつつあり、
その変化に対応していく必要性
などが話題に上がった。

○六年

「単元における象徴的な資料」
を単元全体で活用することによ
って、歴史的な事象について
理解を深めていく実践を紹介し、
その成果や課題について協議を
行った。

【学年部会】

二学期の授業研究会や都小社
研研究発表会に向けて、研究内
容についての協議や指導案の検
討等を行った。

夏季研修会を終えて

都小社研事業部長 尾上 健
大田区立池雲小学校校長

今年度も企業の皆様のご協力
をいただき、五つの研修会を実
施することができました。定員
を超える申込があった研修が多
く、都内の先生方の研修意欲の
高さを感じました。今年度初め
となる造船工場に加え、製鉄、
製紙、酪農、ガスの研修会では、
工場近隣で見学できる場所もご
準備いただきました。充実した
研修内容となり参加した先生方
からご好評をいただいています。
夏季研修会の際は、指導者
本人が実物を見たり、体験した
りした驚きや感動を教材化でき
ることです。子供たちに伝えた
いことが必ず見つかる夏季研修
会です。来年も多くの先生方
にご参加をお待ちしています。

製紙工場見学会に参加して

星立立新井第一小学校教諭 井口 己暖

今年度、初めて都小社研の夏季研修会に参加させていただきました。校長先生よりお声がけいただき、研修会のことを知ることができました。

始めに行った製紙工場では、工場内を見学しました。精度の高い紙を作るために何工程もの作業を行うことや、大型の機械を使って作業していることなど、紙ができるまでの大変さを見て知ることができました。また、食べ物の袋や化粧品を入れる箱など、身近な物が工場で作られていて、とても楽しかったです。

ビール工場では、実際に作られているところを直接見学することができました。工場の方からビールを作る時のこだわりを聞き、同じ種類の飲み物でも会社によって違いがあることが分かりました。

どちらもなかなか自分だけではできない体験で、帰校後すぐにこの学びを、校内で広めました。また機会がありましたら、参加したいと思います。

夏季研修会に参加して

西東京市立けやき小学校教諭 小玉 博亮

今年、夏季研修会に初めて参加させていただきました。5年生の学習に生かせる、ジャパンマリンユニテッド株式会社横浜事業所磯子工場と川崎港を訪問しました。

当日は、それぞれの見学先で、会社や港の概要についてのお話をうかがい、実際に現場を見学することができました。造船所では、高い技術力を生かして、顧客の要望に応える努力や船を作るドックの大きさが想像以上で感銘を受けました。また、川崎港では、コンテナを運ぶ「ガントリークレーン」の真下に行くことができ、その大きさと作業スピード、強風の中での正確な作業をされる様子に圧倒されました。

今回の体験から、日本社会を支える海運業の大切さを感じると共に、教科書だけではなく実際に現場を「生」で見ることができた。2学期の工業単元の指導に、活かしていきたいと思います。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

製鉄工場見学・
江戸切子体験会に参加して

練馬区立大泉第一小学校主幹教諭 飯塚 将史

七月三〇日、JFEスチール東日本製鉄所(千葉地区)見学・工房での江戸切子体験会が行われました。本研究会の夏季巡検の中でも特に人気が高く、今年も早々に定員に達しました。

錦糸町駅南口を出発し、バスで進む道中、鉄鋼連盟の方から小学生向けの教材の案内がありました。

いよいよ製鉄所、というところで津波注意報発令という心配なニュースが飛び込みました。残念なことに、高炉のあるエリアへの立ち入りができず、見学センター内で説明と質疑応答を行いました。

昼食後は「浅草・おじま」での江戸切子体験。伝統工芸士の尾島英治さんからレクチャーを受けた後、専用の機械を使い、ガラスに白い模様を付けるといいう、体験用の制作にチャレンジしました。一心不乱に取り組まれる先生方。一時間ほどで、思い出に残る作品ができあがりました。

夏季研修会に参加して

江戸川区立第六葛西小学校教諭 福田 哲也

東京ガスでは、供給指令センターという都市ガスの製造・供給を集中コントロールしている施設を見学しました。災害時における初動対応と供給ネットワークエリアにおける導管網の遠隔遮断と再稼働指示のシステムや24時間体制での監視、通報があった場合の緊急車両の出勤、ガス漏れ事故等に対応する体制等について説明がありました。

ヤンマーでは、エネルギー事業の取組を紹介していただきました。また、1階フロアに展開されている「ヤンマー米ギャラリー」では、同社が携わってきた農耕機器の進化の過程を見学できます。お米の魅力に関する体験と発見がいっぱいの空間でした。

両社の見学を通じて強く感じたのは、現場で働いている方々の高い意識と社会貢献への熱い想いです。これらの取組を日々の学習などを通して児童に伝えていくことが、我々教員の使命なのだと思います。

夏季研修会を終えて

西東京市立栄小学校教諭 吉永 留加

初めて都小研の夏季研修会に参加させていただきました。研修会では、講義や体験を通して酪農の役割と課題について考えを深めることができました。

吉田牧場での酪農体験では実際に乳牛に触れ、酪農の仕事を経験しました。食は命をつなぎ、その役割を担う一次産業の一部である酪農を知れたことに喜びを感じました。私たちが飲んでいる牛乳は元を辿ると母牛が子牛に与えるためのものであること、そして、本来15年から20年の寿命がある牛が、乳牛として飼われると6年から10年肉牛は2年で寿命を迎えてしまうことに一番衝撃を受けました。

酪農体験でしか得られない学びとして命の温かさがあると考えました。いつも飲む牛乳が最初はこんなにも温かいことは体験なしでは知ることができません。今回の研修では学校と牧場を繋ぐ取り組みを知ることができたため、教員を続けていく中で活用していきたいと考えました。